



釣り日和だと思えた休日。

釣りだけに集中する時間を作れないと楽しめない男がいる。

そんな僕は、裸の釣り竿を片手に電車でやって来た。

まだ稚鮎が釣れるらしい。

アサリ採りの舟が着く棧橋がポイント。

できれば誰もいない方がよかった。

駅を出て地下道をくぐる。

ちらっと空を見直して、ビルの間から覗く湖を望む。

光を弾くのは湖面と有料駐車場の数台の車。

身軽になった観光バスもひと休みしている。

周辺の人影は、ほとんどが釣り客ではなくて、散歩か昼休憩が目的。

時々カップルもいるが、釣りの邪魔にはならないだろう。

僕は棧橋の方を確認しながら湖岸沿いの公園へ出た。

空には眩しい太陽。

それを抑えきれない薄い雲。

遠くには霞んだような大きな橋。

行き交う車の屋根だけ見える。

橋の下の、海と湖がつながる辺りから波の様子を伺った。

これからする釣りには関係なかったが。

程よい風を頬でチェック。

潮の香りも気にならない。

僕は引き潮によって足元をさらけ出した大鳥居を眺めながら準備をした。

手竿をめいっぱい伸ばした。

特にこだわった装備はなくて、実は知識もない。

ただ嫌いじゃないってだけ。

絶対釣ってやるなんて意気込みは潮風に流すつもり。

今日は生きてる餌は使わない。

小さな毛針だけだ。

栈橋から下を覗けば、そこに獲物が待っている状態。

水は澄んでいて、底まで見えるくらいだ。

僕は稚鮎の群れを探して、少しずつ移動した。

見つけるとすぐに糸を垂らした。

ヤツらのいる深さにゆっくり合わせる。

人にも住む階層があるよな。

ふと、そんな思いまでが釣れそうな気がして、釣りは始まった。

釣れる。

この前と同じだ。

簡単すぎるくらい。

勘違いしそうな勢いだっただ。

稚鮎は大きくても人差し指ほど。

けれど、釣り上げる喜びは両手に抱えきれない。

後でどうやって食べようか考えると、真っ先に思い浮かぶのは素揚げ。

それとカレー。

稚鮎カレーは成功例。

上品な香りにつられてしまう。

僕の視野は、時間と共にかなり狭まっていった。

魚と糸と竿しか見ちゃいない。

三十匹くらいを釣り上げた時、見物客に気づいた。

バケツの中の収穫を覗く人々。

T字型の棧橋にはいつのまにか数人集まっていた。

欄干に手をついてこちらを見ている。

湖岸はもう、当たり前のように賑やかになっていた。

ひと休みしよう。

僕は少しだけ遅い昼食を取ることにした。

竿を縮め、バケツに蓋をした。

荷物を全部持って近くのコンビニへ向かう。

その途中だった。

湖の景色が気になった。

ずっと遠くに、光る一本の縦の筋。

それも何本も見えた気がした。

天から地へと張られた天蚕糸みたい。

何度か瞬きして確かめてみたけれど、はっきり確認する前に見えなくなった。

目の錯覚だろうか。

近頃よく耳にする飛蚊症ってやつなのか。

病気じゃないらしいけど、自分の視界もそんな感じがする。

さっきまで釣り糸をじっと見ていたせいもあるだろう。
そう想いつつ、僕はコンビニのドアを押していた。